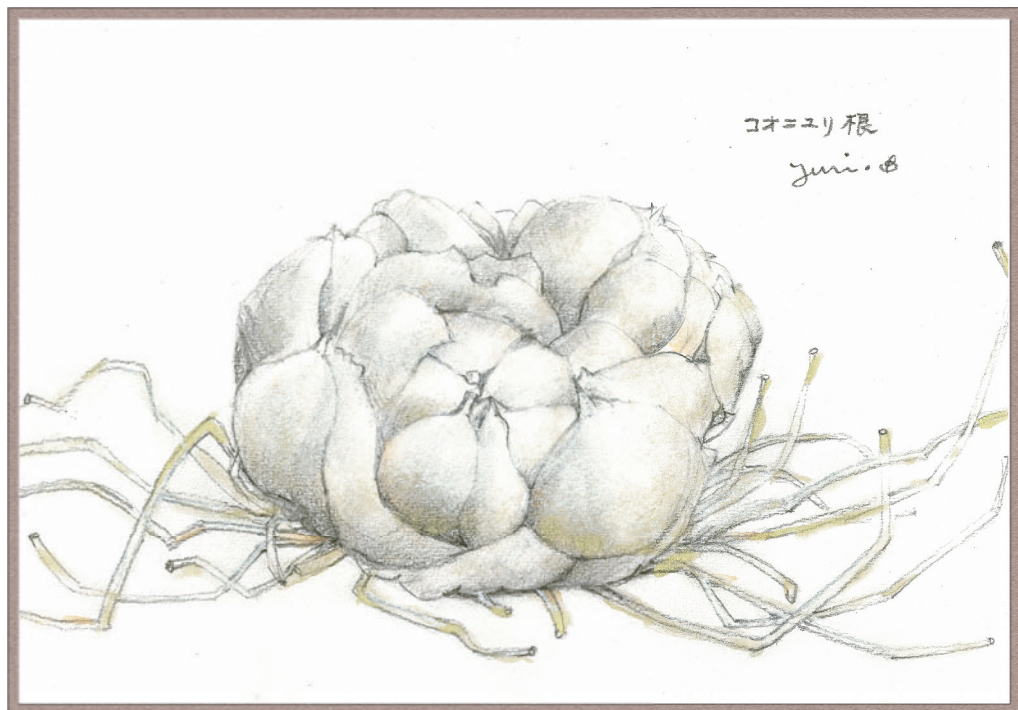


# 三河 アララギ

平成二十三年

新年号

第五十八卷 第一号



ニューヨーク日記(51) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 30, 2010 : Jamaican Sunset

## Blue Shoe Diaries

---



ShoeLadyはジャマイカでこんな夕日を見ている間BlueCatはNY何しているんだろう？美味しそうな写メールもチョコチョコ入ってくるし。。。イライラ。。。何処か友達と美味しい所食べに行こうっと！

---

ShoeLady is watching a beautiful sunset in Jamaica. BlueCat is in NY being a slave to work. Grrr... I keep getting photos of yummy Jamaican food via MMS... Alright, there's only one thing to make things better. I'm gonna go out to a delicious dinner! Wine and food, here I come!

# 目次

## 第五十八卷第一号(通卷六八五号)

表紙(コオニユリ根)	今泉 由利(一)	昔日	平松 裕子(二五)
ニューヨーク日記(51)	Bire Shoe(二)	明るく木星	小野可南子(二六)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より	(四)	クコの実	山口千恵子(二七)
歌集・一本の木	杉浦 弘(五)	箱根	夏目 勝弘(二八)
新しき光	岡本八千代(六)	童笛	秋山 逸穂(二九)
育ちよし	白井 久吉(七)	あきる野	井村 喬泉(二九)
ナノビーム	今泉 由利(八)	贈呈誌	(三〇)
孫と娘と	伊藤八重子(九)	ことよせ	いーはとぶ(三一)
虫の音	弓谷 久子(十)		伊藤 忠男
帰り来よ君	青木 玉枝(一一)		白井 信昭
私の暮らしに	佐々木利幸(一二)		植村 公女(三二)
追体験	半田うめ子(一三)	「俳句」	一石
霜月四日	近藤 映子(一四)		喜仙
お大事に	胃甲 節子(一四)		皓一
明け暮れ	伊与田広子(一六)	和歌から派生した季語の本意(その六)	佐藤 喜仙(三四)
母のかたみ	清澤 範子(一七)	絹の話(一)	今泉 雅勝(三五)
絵手紙	金津 文枝(一八)	物理学者と詩歌の世界(12)	一石(三六)
シルバーカー	林 伊佐子(一九)	鎌田敬止という人(四十九)	鮫島 満(三八)
秋深み	安藤 和代(二〇)	「水魚」のことから(120)	岡本八千代(四〇)
ミゾソバ	内藤 志げ(二一)	ことのはスケッチ(384)	今泉 由利(四一)
夢	北川 宏廸(二二)	頌春	(四二)
熱意	杉浦恵美子(二三)	和菓子街道(51)	平松 温子(四三)
ジャカルタへ	堀川 勝子(二四)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規程	(四四)

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

海のむかう高師のあたり見えわかずつづく笠山雨にかすみぬ

P  
151

枯れし松めぐれる柵をぬけいでて志摩も潮も曇るひといろ

P  
152

歌集 一本の木

杉浦 弘

まむかひに低くなりたる冬の日  
に肩おとしたるわれは歩める

暖房にくもるガラスを拭くあと  
にまた重い冬の空が見えてゐる

冷えしるき夜あけを風のつ  
のり来て夏よりかける風鈴が鳴る

## 新しき光

蒲郡 岡本八千代

書屋の窓カーテンを開ければたちまちに今朝の新しき光がさし来  
新しき朝の光の空に舞ふ鳶の一つよ愉しからずや

庭に佇つわれにもけふの新しき光は照りつつかがやきにつつ

この萩は浄瑠璃寺萩よと言ひたまひて掌に下されき根つきの苗よ

白と赤の暈<sup>ぼか</sup>しの花の木瓜の花冬近きまでも返り咲きをり

又の名を長寿梅とか赤と白に花ほけて咲く時じくの木瓜

夜の更けに「えにし」の礼状を書かむとす墨<sup>かす</sup>すりてゐる幽かなる音

朝に咲くたった一つの月見草不思議とは思はでそのしづかさよ

成人の姉と弟の孫二人萩そよぐ庭に来たり佇ちをり

わがつくる今朝の味噌汁は四人分少し多めのダシ汁にほふ

## 育ちよし

新城 白井久吉

見たところ同じやうなるりんごさへ昨日の物と味の異なる

万病に効くものなどはなしといふ医師のことばを今も信ずる

畑にはいまだ少しの里芋があれどなかなか掘れぬくやしき

栃の木の下一面の栃落葉朝の日射にくつきりと見ゆ

われに代り妻の世話せし大根も葱も白菜もみな育ちよし

再びは地下足袋を履き鋏握ることも出来ぬとひとり思へり

酒粕が体に良いとテレビにて報道あれば酒粕が売れる

一本の松の手入れの料金が三万五千円と聞けば驚く

色づきしスダチの汁をしたたらせサンマをつつく夜の食卓

浅漬にする大根を二十本一輪車に載せて運び来れり

## ナノビーム

東京 今泉 由利

ナノといふ単位の中にわけ入りぬ3Dのメガネをかけて

てのひらに氷の分子のフワーときて土星の輪わっかのシミュレーション

これ以上小さくならぬ素粒子の操作をするといふが聞こゆる

おだやかに朧朧の月あかり光速といふことは思はず

忙しくない朝の日の巡りこし私の部屋に朝日誘ふ

自らの命のために調理する長い長茄子まず輪切りにし

八分の分差ありつつ太陽光私の部屋に日溜りつくり

一億分の一センチメートルの一粒の原子が幾つか私が出来

原子核の陽子の数のその数の異なるといふ元素の種類

水素よりヘリウム炭素酸素へと出来初めきたり宇宙のはじめ



## 孫と娘と

豊川 伊藤八重子

白菊も黄の石路も咲き初むる秋麗の秋は庭より来たり

やうやくに祖母となりたる妹のみどり児楽しく描ける絵手紙

広々の店舗を巡りて買物ショッピング樂しかりけり孫と娘と

ほととぎす群咲く庭にしみじみとわが胸うちも秋深くなる

わが母も兄も弟もおとこ逝きし冬寒かりし日が又やつて来る

幼き日熱を出だししわれのため透き通る葛湯を作り給ひし母

朝の庭に真つ赤に色着く山紅葉ヤマモミヂ五日程わが留守にせし間を

爛々と海に落ちゆく太陽をおろがみにけり今日助手席にて

まつ白に磯夫ダチュラは庭に咲き八十四歳われの生日

赤飯とケーキの並ぶ夕卓に改めて述べる「ありがとう」

## 虫の音

豊川 弓 谷 久 子

すだくと言ふ言葉なつかし虫の音の何時か絶えをり夜の我が庭  
父恋し母が恋しと虫の音が聞こゆと言はれし静誠様は

大雨を如何に耐へしか女郎蜘蛛雨ニモメゲズ声を掛けやる

犯人を忘れて又読むミステリー忘るる事も又よきかなと

朝顔の小さき紫の終り花立冬の今朝おだやかな空

えにしとふ表紙の文字のやさしさをそつとなぞりぬ戴きし歌集

鴉が鳴く鶉が鳴く秋の空老猫とをり日向の縁に

一せいに櫛並木は黄葉せり見馴れし景色もかくはなやぎて

櫛並木の冬木が芽吹き葉が繁り今日は落葉の舞ふ下を行く

霜月も終りに近し白じろとダチュラの花の咲きつぐあはれ

## 帰り来よ君

伊丹 青木玉枝

霧雨に黄砂も交りおぼろなる伊丹の街を七階の窓より

残生をかく美しくありたしと箕面みのうの紅葉に包まれてゐる

淵となり瀬となりしぶき上げる滝箕面の紅葉写し流れる

人波の波の一人にわれもゐて箕面の紅葉の滝しぶきうく

阪急の電車の席の好青年老いを忘るるわづか一駅

独り居る六畳一間のわが部屋はしみじみとしつつおのれの自由

シクラメンの白は淋しと濃き紅を幾鉢も咲かす嫁の腕前

征く君と交せし歌の七十年心に秘めて今も忘れじ

半世紀世は移るとも君はまだルソンに眠る帰り来よ君

幾たびも帰りて佇つはわが家跡「無」をたしかめつ侘しさの増す

## 私の暮らしに

豊橋 佐々木利幸

喜寿過ぎて老いの病と言う腰痛も膝痛も加わり私の暮らしに  
酒を飲む量が増えて来たり妻の亡き暮らしを我は三十年を経て  
腰椎症は軽き病と言はれ居り診察下されし若き外科医に  
パソコンに印字を我は楽しみ居り文明歌集を今日も開きつつ  
独りして暮らせる我に日日届けくるる弁当屋さん居り  
幾度も我は広辞苑を開きたり診断されたる腰椎症などを  
脹脛が疼痛する今朝は太田橋まで杖を突きつつ散策して  
膝に疼痛をおぼゆる今朝は加はりたり保殿七滝の撮影実習に  
紅葉したる楓を我は幾枚も撮りぬ三河湖の湖畔歩みつつ  
一万歩も今日は歩きたり野原川も羽布のダムも幾枚も撮りて

## 追体験

新城 半田うめ子

追体験社会教育に加はりし西行と芭蕉のさやの中山

金屋より芭蕉の句碑を求めつつ友と語り合ひ歩き行きたり

閉店となりて淋しい楽しみの医学と健康豊橋温泉

鬼薊<sup>おにあざみ</sup>求めて川辺友よりのさそひのありて秋の夕暮れ

庭中に植ゑて十年木れんの葉のはらはらと舞ふ伸びにのびたり

若き日にしらみの多き友の為馬酔木を取りに行きたりしこと

家族にて行きたりし日あり高原の富貴の森の南木曾温泉

わが友は働き者にて病院の入院患者の世話をしたりき

戦時中食料不足に生き倒れしを救ひたりきわが友初枝様

霜月四日

名古屋 近藤 映子

浮び来る言葉のメモをしそびれて思ひ出す時時を要する

子等二人各々育ち内外にささえてくれたり夫護りつつ

上海より息子の電話霜月四日婚姻届を二人にて終了と

我夫に息子伴侶決つたと話せば左手握手の力強まる

我夫はベッド離れぬ今なれど我左手の握手はかたし

霜月の涼風吾の身に沁みて風邪引きてしまひぬ口惜しや

風邪引きて夫の見舞ひ出来ずして医師より休養の指示受けぬ

やうやくに我夫の熱さがりても吾も風邪引きゆけもせず

われも又風邪引きて臥しわが夫の見舞ひの出来ず淋しき一日

深まりし秋の夕日は赤くはえ見降す紅葉も正に真赤に

## お大事に

豊橋 胃 甲 節 子

洗顔も未だに老いの遅き朝お隣より届けらるる京のお土産

熟れ落つるばかりに紫美しき通草が高みに二つ揺れをり

予約日の市民病院売店にてとうとう恃みの杖を購ふ

吾が病むを知り給へるやダンデイな先生は別れ際お大事にと

モクセンナ今年の花は天候に恵まれしか長く長く咲きをり

遅き歩みの散歩も負担になりつつ沁々切無き病むといふ事

田の路に自転車よけて立止るに学生は氣持良く挨拶して過ぎたり

見はるかす広き田圃は美しき穠の淡きみどりひと色

河川敷の草刈終りしばかりにて神田川の流れ只々美し

遠目には真白く薄の原と見え行けば高みにありて見えざり

## 明け暮れ

豊橋 伊与田広子

わがクラス五人来たれど残る人無事か否かと安じゐるなり

同級会後に残るは誰かなと年より若く見ゆる人探す

幼き日母胆石にて苦しみし死ななきやうに祈りをりしを

毎日を癌の予防に明け暮れぬ水分とりて身体温む

今年暑さ続きの秋にして柿の実二つ残りて落ちし

この暑さ来年又も続くなばわれも生きてはおられぬ暑さなり

明朝は十二月末の寒さと云ふひとつつき一月足らずに真冬になるか

テレビを買替へむとわれ通ひし小学校の先の電器店に行く

店員の応対順番待ちなりポイント付きにて客の多きに

会社名横の寸法云ひて決むるテレビの入るは年末と云ふ



## 母のかたみ

春日井 清澤 範子

猛暑の夏やうやく過ぎて冷え込みぬ母のかたみのセーターを着る

吾が母は三十八kg小柄なるセーターの袖に折目のありぬ

母のかたみのセーターの色は小豆色私に合ひて暖かきかな

娘を持ちて母の温みの有難し娘は一人身愛しきかな

五十年合はず友なり吾が声を聞きたしと言ふ電話懐かし

猛暑去り朝夕涼しくなりました座蒲団カバーをふつくらキルトに

八王子神社に詣で柏手を打つ音木立を飛び交ふ小鳥

小鳥の声に一時耳を澄ましをり群なして何処へ飛び立ちゆきしか

廊下より見ゆる椿の花蕾ニツニツ枝先にあり

木犀のオレンジ色の花終り側溝に散れるを惜しみ掃くなり

## 絵手紙

島根 金津 文枝

松江城の堀河と宍道湖一面青藻広がる酷暑の為自然の恐ろしさ  
寒くなり雪降れば青藻も消えるとアナウンサーの説明に安堵す

霊峰大山の紅葉大正池に合せ鏡の如く写る光景に驚く

亡き母に手の上庖丁で豆腐を切る事教はりぬ今も続ける

十五年生活を共に愛犬は車のリズムにお帰りと吠え

絵手紙に書いたしめじ茸友に戴き豆腐入れ一人の清し汁おいし

絨毯の如く散る銀杏社会事務所坂に拾ふ絵手紙の植村さん

映像を見て夫と茂吉百年祭熊本長崎歌碑を旅せし

八幡宮に櫛落葉のふわふわあしたゆふべ繁し朝夕に掃き寄す仕事

南天の太杖難を逃ると城安寺より戴きしもの

## シルバーカー

岡崎 林 伊 佐 子

娘の呉れしシルバーカーに痛き膝かばふことなく歩調あわせる

シルバーの仕事に行きし夫の留守弁当持参の畑仕事する

雑念にふけりてをれば背に触れる友に気付きぬ耳遠きわれ

褐色か枯色に変わる蠟螂が大根青菜をひっそり歩く

初霜はけさ降りにける茄子の木を引きぬく両手の悴むものを

あとになり先になりつつ山道を登りて夫と雑木を伐る

冬ごもる薪を集めし若き日のかまどの煮炊の今は懐かし

柿の実のひとつだになきふる里の異変に遇ふは初の体験

放置した山畑を今も守りゐるひとつの影となりし案山子は

常の日は畑を荒らす獣らもハンター季と命憂へむ

## 秋深み

豊川 安藤 和代

恋などは早過ぎる孫と古稀近き吾と映画「君に届け」見る

指先程の里芋けふは衣かつぎ胡麻みそ柚子みそ孫の好物

書の道にすべてをかけて八年目孫は二十六個のトロフィーを持つ

澄む空に響き渡る百舌の声けふ隣家へお嫁さんが来る

百舌が鳴きコスモス揺れてうるこ雲ちよつぴりオセンチ秋が大好き

蝶てふの屍の上葉の落ちてまた葉の落ちて秋深みゆく

亡き母の鏡台に写す吾が姿遠く踏み切りの鐘が聞こゆる

「嵐」では櫻井君が好きと言ふ孫よ私は松潤が好き

心配は胸いっぱいを押えつつ笑顔で送る模試に行く孫を

嫁亡きを幾度夢かと思ひしが早一周忌冬薔薇の咲く

## ミゾソバ

豊川 内藤 志げ

畑土手に広く群れ咲くミゾソバを立ちて眺むる屈りても見る

畑土手の草を刈るぞと夫言ひぬ草はミゾソバ花真盛り

高速道の木立の中より翔び立つはジョウビタキらし白き紋見せ

ころころと播種機を押し一反歩この蒔藜草の出荷は真冬

本宮の山頂に懸かる白き雲ゆるり流れて全けき姿

夫は宿守妹と二人うどん屋に赤き財布は妹のもの

野も山も眩しきほどに輝けりやうやく秋の陽射しとなりて

祖父とその父母との名の記す明治五年に霊場巡拝の碑

佛壇の御本尊様わが先祖の霊場よりと伝へられゐる

立像もお厨子も黒ぐる煤けをりわが家のお守り心のゆらぐ

## 夢

東京 北川 宏 廼

沈みゆく夕陽の空の高低に鷗と鳶の由比ヶ浜

われといふ細胞群の大宇宙六十兆個が陽に向きて立つ

わが国の春夏秋冬変はりきて春と秋とが削られてゆく

東京の月夜の空を真ぐ立ちてスカイツリーはすくすくと伸び

松茸を残して食べるぺらぺらのぺらぺら二枚の松茸弁当

ともどもに距離保ちつつ「言葉」あり保つ言葉と隔つる言葉と

番号にて顧客の名前を呼ぶことが個人情報保護といふのか

若きより夢を追ひかけ七十にて追ふ夢のあるがうれしき

明治二年袋物問屋を創業し暖簾おろして二十年なり

資源物回収ゴミにひっそりとマルクス全集積みて置かるる

## 熱意

蒲郡 杉浦恵美子

軸長さ万年筆にて推薦書清書して居り最後の一枚

出し抜けに滅茶苦茶多忙収束す窓外の櫛知らぬ間紅葉

大事なのは一にも二にも熱意だよ我がアドバイス受け止めて居り

四十四人四十四様の二学期を過ごして居りぬ三年生は

寝てる子も居れど食ひ付く瞳もあり二層化したる理系の古典

生徒等と奥の細道群読す古典授業の最後の教材

人生は旅と芭蕉は言ってるわが解説に生徒等素直

行く春から行く秋までの旅の長さ生徒等分かるか奥の細道

「舞姫」の結末までにあと少し読解丁寧丁寧に丁寧にせむ

追ふ日々がいつしかひたすら待つ日々に入れ替りたり我のこの頃

## ジャカルタへ

豊川 堀川 勝子

吊るし柿のひりひり乾く庭を背に共に老いゆく我らが二人  
軒に吊るす柿のノルマはあと僅か漸く旅行の準備が出来る

おぼろげな記憶の道を辿り来て夢か現か吾が家の前

住む人の好みに家は変はりつつブーゲンビレアの生け垣見えず

垣の縁に備ふコンクリートのゴミ箱は見覚えのあり今も保ちて

ジャカルタでの暮らしはメイドと運転手に擁られ乍らの二年の歲月

ジャカルタよりバンドンに向ふ車窓より見渡す棚田のみどり豊けし

田植の田に発育途上に黄金の田並ぶ稲田に吾が目を見張る

熱帯の地にては可能な三毛作四季のおりなす景色にあらず

バンドンの棚田の畦には高々と榛の木ならずバナナの並木



## 昔 日

豊川 平松 裕子

たかが干し柿されど干し柿こんなにも芸術的に作る君かも

両の手にしばし包みて我が店の石の兎を買ふといふ客

両の手に納まる小さき石の兎幾人の手を渡り渡りゆく

墓原の日なたを求め焼香を待つ間も弾む親族らとの話

校長まで務めし従兄の家庭科のレポートを我が書きしことあり

忘れゐることの多きよ従兄弟いとこらの話の中に昔日偲ぶ

我のこと詠み給ひしも我のみが知る楽しさよ「えにし」読みつ

感謝のみ綴りて成りし歌集「えにし」自づと温みの伝はりて来ぬ

売ることも仕入れることもままならぬそれでも止めぬほとほと貧乏

売らむとふ望みに積み込む大方は残りて帰る荷物なりけり

## 明るく木星

豊川 小野可南子

射し初めし朝の光にルリ色の小さきコルリ留まるはなし

賜はりし歌集「えにし」の金の文字ほのかにやさしく伝ひくるもの

暮なづむ中空たかく白々と白透きとほる十三夜月

報恩講の鐘鳴り渡る寺庭の散らばふ紅葉のひとつを拾ふ

体内の活性酸素を除去すると聞かば信じてサトイモ芋茎ずいき

ほっこりと煮上る里芋お手塩にあなたが丹精のこれが八名丸

月の出の遅きこの夜の高空にあかあか明るく木星輝やく

児童等と共に歩める常の道銀木犀のしろじろ薫る

西にやや傾きはじめし陽を享けてイロハ楓は血潮の色に

昨日までは気づかざりけりひつじ田の黄葉に夕ざすひかり遍し

## クコの実

豊川 山口千恵子

中空にかすかに吹く風あるらしき花びらゆるる皇帝ダリア

冬の日短かき櫓の影つくる歩きてゆかむ田の原の道

ヤブガラシの被ひ尽くせる繁みの中瑞々朱きクコの実みのる

秋の日に色づく赤きクコの実の尖れる一粒ほのぼの苦し

クコの実はしだるる枝に連なりて射せる秋陽に朱色輝やく

三角に尖れる神島ま近に見てわが乗る知多丸ゆるゆる過ぎゆく

神宮の白砂踏みてゆく傍の形良き松は雌松ならむか

混みあへる人の流れに歩みゆき出口につきたりおかげ横丁

黄葉する银杏二木鮮やかにこの家もつひに無人となれり

精米機に硬貨三枚おとし入るるわが田の米は白米となる

## 箱根

豊川 夏目勝弘

万葉の箱根の歌の三首とも離れこし妹を恋ひ忍ぶもの  
息をする風に鉾杉大きくゆるる北上してくる台風近し

台風うみの雨を含む空の色湖も一つの色に静もる

もみづる枝緑の枝枝織り成せるカエデ目に立つ箱根の山は

台風うみの去りて未だしとどなる雨に煙れる箱根の山並

芦ノ湖は恐るるほどに静もれり昨夜に台風遠くをゆきぬ

北側に枝を伸せし太き松煙れる雨に赭あかあか光り

台風うみの去りて午後より富士山の裾野の広がり見えてきにけり

特別に富士山見たしと思はねど見えねば損した思ひになりぬ

飲み物を我慢してこし車のなかサービスエリアのトイレは二階

「招待」

竜笛

東京 秋山逸穂

つむじ風鳩の羽毛を舞い上げて桂並木を縫うように去る  
むらさきのぶどうの房のぶらさがる棚より漏るる光に焼かる  
沢蟹のあゆみをとめし我が影は柝の葉すかす陽射しより生まる  
牛舎より声長長と聞こえきぬ夕陽浴びいる宿に向かえば  
竜笛の調べの聞こゆる公園の柳の枝にからまる満月

あきる野

東京 井村喬泉

あきる野より秋留野が良し自動車のガラスにもみぢは舞ひ寄りて散る  
謝礼とはさらりと渡すべきところいくらですかとききてくるなよ  
夫と子が仲違ひせしこと涙して子よりも若き吾に意見を求む  
電飾を背のある木々はまとはされ町おこしとふ仕事してをり  
爆睡の爆とはいびきのうるささが我らの眠りを壊す意なるか

贈呈誌 十一月号

「青森アララギ」

阿部 勝美

夜を徹す鉄筋工事の高き灯に光みだれて雨の降りつぐ

「愛媛アララギ」

栗田ちえこ

人の声をききたしと思ふ夕ぐれに間違ひ電話の声やさしかり

「鹿児島アララギ」

浜畑 松枝

ひと本の茎より出でて風にしなふ萩は白花こぼしつ咲く

「高知アララギ」

中平 朝子

終りたる胡瓜のあとをしたたかに自生の朝顔青々のぼる

「滋賀アララギ」

稲垣 澄子

手づくりの月見団子の揃わざるままに供えて月を拝みぬ

「灯」

松田はつ子

太陽の斜光の位置が日日変る暑さ残して秋を知らしむ

「冬雷」

関口みよ子

台風の昨夜過ぎたる釜山港ひなたに魚の乾ける匂ひ

「稔」

塩見 瞳

蟬の火は読経する僧の息づかに真すぐに伸びまたゆらめきており

「檜の木」

鈴木 秀子

湯浴みして出でてテラスに枇杷色の少しゆがみし月上り来ぬ

「群山」

山村 陽一

食卓に坐れば匂ふコスモスの牛乳瓶に白く光れる

「明治神宮鎮座九十年大祭献詠歌集」

特選歌

西野美智代

二世帯の上下に吊す風鈴の異なる音色がひびき合ふなり

小三

内田 亮介

こいのぼりゆめのせおよく大空に未来のぼくがけいれいする

小四

宮木 秀隆

山の田をとんでたほたるこのぼくになついでくつで光つているよ

小五

早川 慧

太陽がうつつて光るプールの水をぼくが飛びこみ光をちらす

小六

成瀬 流奈

大好きなきらきらかがやくトロンボーン天使の音色私も目指す

中三

芳賀 杉織

頂上に仁王立ちしたその時は下界見下す我は王者だ

高一

米川 恵

肉まんを一緒に食べたねおばあちゃん今日も海が青い横浜

「穂の原」

松井 花子

猛暑去り上弦の月朝やけに染まりきらめく晩秋の夜明

中井 美恵子

乾燥せし蓮の花はカサカサとわずかな揺れにその実飛び散る

田中 浄子

高校の文化祭にて聞く太鼓したら太鼓に元気を貰う

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

わが家に高一の孫不意に來ぬ背のびしてみたり見上げたりして

岩瀬 信子

山の端に今沈まむとす赤き日を帰りゆく娘と黙しみてをり

三田 美奈子

東の窓よりやさしき光さすあ娘伸枝が嫁ぎてゆくよ

稲吉 友江

君の待つカフェの坂道に咲きてをり四季桜の花白く小さく

鈴木美耶子

久しぶりわが家に來たれり友の顔このほほゑみは何年ぶりか

吉見 幸子

湯上りにと薬箱より馬油だすその飴色のままの液体

牧原 正枝

「投稿」

百三歳は天寿なりとて悔いはなし口では言えど目には涙が

伊藤 忠男

さわさわと風に揺らぐや草紅葉激しく燃える炎のように

ヒラヒラのアサギマダラにゆきあひぬ遅れるなかれ渡り氣遣ふ  
木犀の香りの届くこの部屋に妻と憩ひぬ日に幾度も

白井 信昭

「俳句」

針穴に目を細めぬし今朝の冬

植村公女

立冬や麻婆豆腐のふんわりと

角かどの秋明菊や村閑か

今ここは枯れ葉乱舞の世界たり

一石

人間の命と歌ふ秋夕暮

横たはりじつと死を持つ秋の蝶



霜柱踏み跡光る朝かな

喜仙

冬夕焼富士見ゆる田に忘れ鍬

葉からまつ松の黄金にひと山粧ひぬ

银杏の踏まれつぶれて酉の市

皓一

熊注意警告あるや紅葉狩

集めても集めて止まぬ紅葉かな

# 和歌から派生した季語の本意（その五）

柿本人丸（続後拾遺集）

「笹」同人 佐藤喜仙

15 初春（新春・迎春・今朝の春・おらが春）

「九重や玉敷く庭にむらさきの袖をつらぬる千世の初はる」

藤原俊成（風雅集）

「初春の花の都に松を植えて民の戸とめる千代ぞしらるる」

前関白（新勅撰集）

明治五年十一月まで使われた太陰太陽暦は基本的には月の運行を基に定めた暦であったので、陰暦正月は春と決まっていた。一方太陽暦は月の運行は無視し、一年間の太陽の動きだけを考えて作成された暦である。従って太陰太陽暦から太陽暦に切り変わった時、歳時記上では多くの矛盾が発生した。その最たるものが一月で、立春より一ヶ月以上も前であるにもかかわらず、今でも年賀状には「新春」とか「迎春」が使われている。それ故歳時記には「冬」とは別に「新年」を作らざるを得なかったのである。

例句

鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春

基角

茶の花に尚新春の日和かな

青畝

新春の人立つ書肆に今日も来る

静塔

16 初鶏（鶏の初音・鶏の初声）

「春来ぬと人しも告げず逢坂の木綿つけ鳥の声にこそ知れ」

「関の戸もあけゆく年に相坂のゆふ付鳥の春の初声」

大藏卿有家（喜多院入道二品親王家五十首）

この両歌に読まれている「ゆふつけ鳥」は鶏の古名であり、元日の暁に鳴く鶏を意味している。元日を「鶏旦」と言うはそれ故である。

例句

寝ぬ夜寝て榊に鶏の初音哉

淡々

初鳥や天地の凍に朗々と

月斗

初鳥の声山光の空はくる

亜浪

17 若菜摘（若菜・初若菜・若菜野）

「明日よりは春菜つまむと標めし野に昨日も今日も雪はふりつつ」

山部赤人（万葉集）

「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ」

光孝天皇（万葉集）

初春の若菜摘みは既に民間では行なはれていたが、光孝天皇（在位八八四〜八八七）、醍醐天皇（同八九七〜九三〇）の時代に宮中の正月行事として定着した。摘み取るの言葉はゆる春の七草で「芹・薺・御行・はこべ・仏座・すずな・すずしろ」等が中心であった。

例句

さのふけふややはらはるる若菜かな

樽良

籠の目に土のにはひや京若菜

乙字

草の戸に住むうれしさよ若菜摘

久女

## 絹の話 (1)

今泉 雅勝  
(アトリエトレビ)

今日の地球上には10万種類とも言われる絹を作る生物が棲息しています。今日の一般の絹はその一種に過ぎません、戸外で見かける蓑虫の繭や蜘蛛の糸、蜂の巣も海で岩に着いている接着部(貝絹)もみな絹なのです、

今回はお正月ですので、金色の糸が出来るムガ蚕の話から始めましょう。

この絹は天然で黄金色に輝く、世界でも珍しい野生の絹で、和服にすると八百万円もする物が有りますので、垂涎の一枚とも言われます。

(私共ではさほど高価では有りません)

原産地は高温多湿なインドのアッサムの一部で、ほんの少量しか採れない薄茶色で、絹層の柔らかい繭です。昨秋、35年のムガ蚕との取組みの中で最も品良く金色に輝いたシヨールが完成しました。世間では黄繭やインドネシアのクリキュラ蚕繭(金色繭、糸は黄茶色)で作られた物もゴールドシルクとして売られています。実は黄色やカラシ色です。

この絹は地球上のどんな繊維より紫外線を吸収、反射し、雑菌の繁殖を防ぐ抗菌性、吸臭性に優れ、保・放温性、保・放湿性、緩衝性(物

が当たってもけがをしにくい)等も顕著です。

絹は人の体に一番親和性のある繊維ですので、健康に良いばかりか、繭を作る環境は空気も水も美味しくする広葉樹林です。農業も大敵ですので、絹を着る事は環境保全に協力している事になります。

絹と言えば洗濯などお手入れがむずかしいと思われている様ですが、水洗いをおすすめします(25℃〜30℃)。洗剤は中性洗剤(頭を洗うシャンプーなどよい)。洗濯機は絹用に来ていないので、手で押し洗いして下さい(もみ洗は枝毛が起き易い)。水が垂れる位の絞り(強く絞ると乾いた後も絞りじわが残る事があり、プレスしてもとれなくなる場合が有ります)。一般の白い絹は日陰干し、ムガ蚕は紫外線に強いので直射日光でもかまいません。プレスはスチームアイロンを直当てで結構です、アイロンを浮かせてかけないで下さい、小じわが発生します。ドライアイロンは避けてください。

保管は風通の良い所が最適ですが、虫は絹を食べますがあまり好みません。10メートル以上の高い家はほぼ大丈夫です。特に野蚕絹はタンニンを含んだ物が多いので虫は嫌います。

繭は動けぬ蛹を羽化する迄前述の機能性を駆使して大切に守る装置です、人は五千年も前から上手に利用して来ました。虫に学ぶ事が多いです。

## 物理学者と詩歌の世界 (12)

一石

J・ロバート・オッペンハイマー(J. Robert Oppenheimer, 1904-1967)は、ユダヤ系アメリカ人の物理学者。ハーバード大学で化学を専攻、ケンブリッジ大学に留学。キャヴェンディッシュ研究所でニールス・ボーア(参考資料1)と出会い、理論物理学の世界へと入っていく。ゲッティンゲン大学でのマックス・ボルンとの共同研究による分子を量子力学的に扱うボルン・オッペンハイマー近似がある。32歳でカリフォルニア工科大学の物理学の教授に就任(参考資料2)。

1938年ドイツの化学者オットー・ハーンは、ウランの原子核に中性子を衝突させ、原子核が分裂することを確認した。後にその分裂の際に膨大なエネルギーが放出されることも確認され、核分裂が原子爆弾につながることも間もなく予見された。「もし、ナチスドイツが原爆開発に先んじれば、たいへんなことになる」という大義名分の下、1942年原爆開発を目指す国家プロジェクト「マンハッタン計画」が開始された。

ニューメキシコ州のロスアラモス国立研究所にはエンリコ・フェルミをはじめ、J・フォン・ノイマン(ノイマン型コンピュータの提唱者)、リチャード・ファインマン(参考資料3)など第一級の研究者たちが集められた。そのトップに任命されたオッペンハイマーは後に「原爆の父」とよばれ、栄光と破壊の数奇な運命をたどることになる。

オッペンハイマーは、元々は宇宙のブラックホールの可能性を示唆

した研究者であった。恒星は、燃え尽きたあと、重い中性子だけからなるすさまじく超高密度の中性子星へと変化する。星の質量がある限度を超えれば、中性子星はさらに圧潰する可能性を一般相対性理論の帰結として予測し、ブラックホール生成の研究の端緒を開いた。しかし、彼のブラックホール研究はマンハッタン計画への参画によって中断した。

1945年7月オッペンハイマーは、ついにニューメキシコでの核実験(「トリニティ実験」)に成功。すでにドイツは降伏していたので製造された原爆は日本に投下された。広島と長崎の惨状が伝えられたのちは、心境が複雑に変化していく。自身をヒンズー教の教典『バガヴァッドギーター(神の歌)』を引用して、「われは死に神なり、世界の破壊者たり」と核兵器開発を主導したことを後悔した。

1947年にはプリンストン高等研究所所長に任命されたが、核兵器の国際的な管理を呼びかけ、ソ連との核兵器競争を防ぐため働いた。戦後の水爆開発に際して核兵器に反対の立場に転じたため、「水爆の父」ことエドワード・テラーと対立した。1954年有名なオッペンハイマー裁判(聴聞会)を経て原子力委員会はオッペンハイマーを機密安全保持疑惑により事実上の公職追放とした(参考資料4)。

オッペンハイマーは原爆が日本に投下されたことへの罪の意識からか、日本の学者がアメリカで研究できるよう尽力した。1948年には湯川秀樹を、1949年には朝水振一郎を客員教授として招いている。オッペンハイマーは、核兵器の廃絶を訴えながら、この世を去った。オッペンハイマーの生涯に長い間こだわり続けた藤永茂は次のよう

に書いている(参考資料4)。「私たちはオッペンハイマーに、私たちが犯した、そして犯し続けている犯罪をそっくり押しつけることでアリバイを、無罪証明を手に入れようとするのである。(中略) オッペンハイマーは腕の確かな産婆の役を果たした人物にすぎない。原爆を生んだ母体は私たちである。人間である」

原爆の開発に関与したオッペンハイマーは核兵器の恐ろしさを知っていた。

○「世界の人々は、一つに結ばなければならない。さもなければ、人類は滅びるであろう」

○「物理学者は罪を知った(Physicists have known sin)。これは物理学者が失うことのない知識である」(参考資料5)

○「我々には分かった、世界が二度と元の姿には戻らないことが。……………我は死なり。世界の破壊者なり。おそらく、我々のうちの誰もが、何等かの形でそんなことを考えていた。」原爆の最初の実験に成功したときに、オッペンハイマーがヒンドウ教の聖典バガヴァット・ギーターの一節を引用して述べた言葉(参考資料6)。  
原文は以下の通り：

We knew the world would not be the same. A few people laughed, a few people cried, most people were silent. I remembered the line from the Hindu scripture, the Bhagavad Gita: Vishnu is trying to persuade the prince that he should do his duty, and to impress him takes on his multi-armed form and says Now I am become

Death...the destroyer of worlds. I suppose we all thought that one way or another.

○「ゲーデルの仕事は、数学的議論の論理的構造をはかりしれぬほど深め、また豊かにしたのみならず、人間の理性一般における限界というものの役割を明らかに示したのです。1966年オハイオ州立大学でゲーデルの60歳を祝う学会が開かれた際、オッペンハイマーが挨拶に立つて、ゲーデルの業績を称えた言葉(参考資料7)

#### 参考資料

- 1) 三河アララギ、ニールス・ボーア、p.36、第57巻 第10号(2010)
- 2) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 3) 三河アララギ、リチャード・ファインマン、p.36、第57巻 第12号(2010)
- 4) 藤永茂、『ロバート・オッペンハイマー―愚者としての科学者』、朝日選書
- 5) 1947年マサチューセッツ工科大学で行った講演「現代世界における物理学」の中で語られた。  
<http://members.comhome.ne.jp/~rieux2/openheimer.htm>
- 6) オッペンハイマーの証言
- 7) J. Robert Oppenheimer on the Trinity test (1965)  
吉永良昌『ゲーデル・不完全性定理。理性の限界』の発見』、講談社

## 鎌田敬止という人（四十九）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（11）〉

次の手紙は『天上の炎』の発売を光太郎に知らせるために鎌田が書いたものである。

「天上の炎」漸く発売いたしました。朝日新聞の東京版に今日広告が出ました。大阪も九州もつづいて出る予定です。売れてくれればと念じてゐます。（中略）「天上の炎」の訳者から出版者への著作権譲渡証（英文三通） 著作権登録申請書（英文四通、邦文四通） 別便にてお送り致しますから英文のにはサイン、邦文のには御捺印願ひます。他の二通のうち一通はレオン・ブルウ氏へ、一通は小生が所持いたします。登録申請書は文部省の著作権室に提出するのですがこれを怠ると大変な罰金（百万円以下）と一年以内の体刑だそうです。ご面倒恐れ入りますがよろしく願ひいたします。「天上の炎」十部お送りいたします。印刷する前に校了紙に眼を通せばよかつたのですが、誤植があつて恐縮に存じます。やはりあの校正した頃は脳貧血をやつてゐたので具合が悪かつたのでせうか、申訳ございません、お許し願ひます。

（昭和二十六年五月十一日付）

その後、この本は昭和二十八年に創元文庫の一冊として、また昭和三十年には新潮文庫の一冊として刊行された。

この『天上の炎』と同時期に企画されていた「明るいつ時」の出版は大した進展もないまま実現されなかった。

### 5 「智恵子抄」をめぐるつて

『道程』に次ぐ第二詩集の『智恵子抄』初版が刊行されたのは昭和十六年八月、龍星閣からであった。そして、昭和十九年までに十三版を重ねるが、戦争をはさんでその後、昭和二十二年には白玉書房版として刊行される。そのいきさつをまずは白玉書房版『智恵子抄』の「後記」によって見てみたい。

亡妻智恵子に関する私の三十余年間の詩歌を集めて一冊にまとめ、「智恵子抄」と名づけて上梓、先年ひろく世上にすすめてくれたのは、龍星閣主人澤田伊四郎氏であった。其後氏は休養のため郷里に帰省、龍星閣の出版事業も亦暫く待期の姿勢となつた。

今度あたらしく白玉書房をはじめられる鎌田敬止氏は澤田伊四郎氏の快諾を得て、「智恵子抄」の再出版を企てられ、その事を私に諮られた。戦後物資窮乏の折からいささかためられたが、結局私もこれに同意し、更に戦後に出来た智恵子に関する二篇の詩をも追加採録することにした。二篇とも戦後私の居住してゐる岩手地方で

智恵子の祥月命日に書いた詩である。

昭和二十二年六月 太田村山口部落にて

これによって大体のいきさつは分かる。光太郎の、龍星閣の澤田伊四郎に対する感謝の気持ちも十分に読みとることができる。これは澤田宛の光太郎書簡にも、たとえば、「貴下のおかげで智恵子は日本中の女性に愛慕せられ、また光太郎智恵子の男女関係は多くの共感者を得ました、近く貴下宛の揮毫をします。」(昭和十九年七月五日付)というように表れている。

その澤田は龍星閣の活動を中止し昭和十九年八月に「休養のため郷里に帰省」する。そのころ、青磁社編集長の鎌田は光太郎の絶対の信頼を得て『道程』再訂版の制作にとりかかっていたし、戦後にかけても精力的に光太郎のものの出版を手がけたことはすでに述べてきたとおりである。

出版中断の状態にあった『智恵子抄』の再出版を鎌田が企画したのは昭和二十年末から二十一年始めのころであったと思われる。光太郎の鎌田宛の書簡に、「『智恵子抄』重版のことは小生には異存はありませんが、これは龍星閣澤田伊四郎の意向次第です。」とあるからである。また、この年の十二月二十六日付宮崎稔宛の書簡には以前にも触れたのだが、そこには宮崎の独走を抑える意図で書かれたと思われる出版予定に関する「覚書」があり、「『璞書房(鎌田氏)。』：澤田伊四郎が承諾すれば『智恵子抄』一冊。」と書かれている。すなわち、澤田の承諾を条件にして鎌田は『智恵子抄』の再出版を光太郎に申し入れてい

るのである。鎌田が青磁社から独立して「璞書房」を設立することもここで分かるが、これは最終的には「白玉書房」という名称になる。

翌二十二年四月十日の光太郎の日記には、「鎌田氏より『智恵子抄』出版の事」という記事があり、また四月十一日付の鎌田宛書簡には、

「智恵子抄」の出版を澤田さんが貴下にゆづられる事を承諾せられたやうで、小生としては少しも異存ありません。「智恵子抄」は澤田さんの並々ならぬ熱意によつて世上にひろく紹介されたので小生澤田さんにひどく感謝してゐる次第です。澤田さんが龍星閣を再興された暁には何か小生の力を傾けたものをお願いしたいやうな気がして居ります。「智恵子抄」は今でもかなり読みたがつてゐる人があるやうで、時々人から質問される事がありますから、今日出版するのも無意味ではないやうに思はれます。事によつたら昨年あたり新しく書いた智恵子に関する詩を一二篇加へさせていたかどうかとも考へて居ります。いつ頃全原稿をおまとめになる予定かお知らせ下さい。

とあり、龍星閣主人澤田の承諾があつたこと、そうである以上は新しい詩をも加えて早く出版に移したいという意向が光太郎にあることがわかる。その半月後の光太郎書簡には、「智恵子抄の追加分は来月お送りします。二篇だけでせう。」(昭和二十二年四月二十八日付)ともある。

# 「氷魚」のことから (120) 岡本八千代

今月の(十一月)編集室の床の間には、

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 子規

の拓本が掲げられていた。しばらく、そこに子規がいるかのような懐かしさを覚えた。

この一句は、明治二十八年頃の作といわれている。ちょうど、神戸の病院を出て、故郷へ帰り、漱石と逢ったりして小康を得てきた時で、東京へ帰ろうとして、奈良へも寄りみちした。——この時は十月の末か、十一月のはじめころで、奈良の村の辺りはいっばい柿の生っている風情だったらしい。

子規は、くだものが好きで、とくに柿が好きだったようだ。しみじみとした法隆寺近辺の趣の中にあるその感動の心が詠まれていて、名句といわれる所以があるだろう。

子規は、明治二十九年に東大寺へゆき、その近くの宿、対山楼(角定)に一泊した。

奈良の宿御所柿くへば鹿が鳴く 子規

その時の句。法隆寺の句と似ているが、何か思い出があったのでは

ないか。——宿の若い娘が、うつむいて柿をむいてくれた姿に感動してこの一句ができたのかもしれない。

さて、ここからは、子規の小説について書くことにする。

○「山吹の一枝」について。

この作品は、明治23年以後、25年以前の作と推測されている。そして、作者は、「花ぬす人」と「非風」とペンネームで書かれていて、一はずつ執筆したといわれている。「花ぬす人」は子規のことである。「非風」は新海非風という人で俳人。

主要人物は、紀尾井三郎の名で書かれている。モデルは五百木飄亭といわれている。彼が非風に伴われて子規を初めて訪ねたのが明治22年10月7日で実際の執筆は23年とみてよいだろう。(柳原極堂による)

△第一回——たにしん大身の代診 花ぬす人稿

書き出し「むかし、伊予の二名ふたなの嶋に紀尾井何がしという豪家あり 家に子なきを愛いしがある夜の夢に桃太郎が尻をひつたと見て孕めることあり 月みちて生みし子は肥えふとりてあご顎は三重目は三皮に色こそ黒けれ玉とはいかぬも瑠理るりともいふべき男子、親の喜びはいふまでもなく名を三郎とつけてはぐ、む」……以下略。

この三郎を、医学校に通わせ卒業後、高田という医師のもとへ助手として住みこませた。或る日、大阪府に勤める山西という官吏の家へ診察にゆかせられた。そこに十七八歳の令嬢が病に臥していた。(引用文のかなづかい・漢字のルビは私)

(つづく)



## ことのはスケッチ (385) 今泉 由利

### 【細胞膜】

「細胞：細胞：」。思い込んでいた日々。折よく、筑波の「高エネルギー加速器研究機構」より講演の知らせが届いた。

もちろん最先端を教わる筑波通いをした。「つくばエキスポレス」の車窓も楽しんだ。

細胞とは、生命を持つ最小単位。生物の最も基本的な単位であり、一つ一つの細胞が独立して生きている：同じような細胞が集まって一緒に生きている…。

「ヒト」の身体には、六十兆個の細胞が集まって、ヒトを構成しているという。

まず先に、細胞質の最外側にあるきわめて薄い膜に近付いてみることにする。

細胞の周りを囲む脂質二重膜で、主成分はリン脂質とタンパク質からなり、選択的透過、代謝物質の輸送、電気的興奮性、免疫特性などの機能をもつ。

細胞膜の主成分であるリン脂質には、頭部と尾部あり、頭部はコリン・リン酸からなり、親水の性質をもつ。尾部は、炭化水素からなり、疎水の性質をもつ。

極性をもつ液中で、親水性の水に馴染む頭部を外側に、疎水性、水をはじき油になじむ尾部を内側にして、二重層の膜をつくる。この細胞膜の様子を、今現在、これ以上には明確にはならないという、電子

顕微鏡で、細胞膜の構造の本当を見ることが出来た。

丸い頭と、長い尾があるようなリン脂質の分子の可愛らしくって健気で、あんなのが私の身体にいっぱいあって：頼もしい。

「こんなこと知りたかった」と思っていたとき、私の一番身近だった人、大切な大切な人、アルゼンチンのセリーナさんを亡くした。私と同じの、六十兆個の細胞を失った。100%、同じ感覚だった人。

アルゼンチンに着いてしまつて、泣くのを堪えきれなかった時、言葉がわからないことも、一文無しになつてしまったこともいとわず、セリーナさんは、私を彼女と同じ位置にして下さった。セリーナさんはアルゼンチンを代表するナースであつて、マザー・テレサさんと一緒に、世界の百人の女性に選ばれてもいた。アルゼンチンで知らない人はいないほどの名家にして、彼女自身も、室内装飾家、と著名だった。

出逢つてから四十四年が過ぎた。アルゼンチンの全部を世界を、人間を私に教えて下さつて、日本から遠くいることも気がつかなくなつていた。

あいさつをするとき、手をつなぐとき、いつもいつも、「ユリはママ(セリーナの母上)と同じ、細胞が同じ」と言ってくれるのだった。「近くに住もうね」「一緒に住もうね」と言ってくださっていたのに：日本に帰つてきてしまった。

「どうして、こんなに遠い国の人と知りあつてしまったのだろう」とセリーナさんを眺かせてしまい、セリーナさんは今、すっかり私の心の中にいて下さる。

「もう遠くはないですよ」。「いつもいつも一緒にいるんですよ」。「セリーナさん、ありがとう」。

# 頌春

平成二十三年元旦

青木玉枝

安藤和代

胃甲節子

石黒ス工

伊藤八重子

今泉由利

稲石せき

伊与田広子

遠藤脩子

岡本八千代

小野可南子

金津文枝

清澤範子

北川宏廸

近藤映子

佐々木利幸

白井久吉

杉浦恵美子

高山由野

内藤志げ

夏目勝弘

林伊佐子

半田うめ子

平松裕子

平松温子

堀川勝子

山口千恵子

山本恵子

弓谷久子

〒441-0311 豊川市御津町御馬西三七  
三河アララギ会  
TEL (0533)751-2009

## 和菓子街道 (51)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

名古屋の中心地といえは今でこそは栄辺りだが、昔はむしろ、東海道宮宿のあった熱田の方が賑わっていたそう。桑名へ渡る七里(約27km)の渡し付近には250軒もの旅籠が軒を連ね、遊廓や料理屋、芝居小屋なども多く、東海道随一の賑わいを誇った宿場だったという。

宮宿の宮とは、この地に鎮座する熱田神宮のこと。三種の神器のひとつ「草薙の剣」を御神体とし、伊勢神宮に次ぐ格式のある神社だ。この熱田神宮の境内にはかつて「きよめ茶屋」という茶店があったそう。天明5年頃に設けられた店で、人々はここで見繕いをしてから神前に向かったという。きよめ茶屋は今は跡形もなくなってしまったが、茶店に因んで作られたのが現代の門



前名物「きよめ餅」だ。

きよめ餅を頂いて心身を清め、熱田神宮に参拝して旅の安全を祈願。さて、次はいよいよ三重県・桑名だ。

もち米と白玉粉で作った柔らかな皮で漉し餡を包んだ「きよめ餅」。

◆きよめ餅総本家

住所: 愛知県熱田区神宮3-7-21

電話: 052-681-6161

## お知らせ

▽二月号原稿は、一月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不要です。

## 歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## △歌会のお知らせ

二月二十七日(第四日曜日)は、新年歌会として、午前十一時より、御津生涯学習会館(旧御津町中央公民館)で開催します。会食後、歌会をします。会費は、二千円とします。

## 編集後記

▽十二月十二日は、新年号の編集会です。いつものことながら、一年の過ぎるのが迅いのに驚きます。

平成二十三年の一月号から、第五十八巻目となり、一月号は通巻六八五号となります。五十七年間、一度の欠刊もなく続けられてきた長い年月は、尊いものと思えます。

先師の方々の並々ならぬ努力とご指導があらためて思われます。

御津先生の常に言われていたことは、歌は暇があるから作れるものではなく、忙しい生活の中にこそ作歌の動機が無限に湧いてくるということでした。作歌は一日でなるものではなく、年月を重ねてこそ成果が見えてくるものだということです。

続けていくことが大切であるということとを、あらためて思います。

新年を迎え、新しい気持ちで作歌にとりくんでいきたいと思えます。(山口)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができ、

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができ、毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年十二月二十五日印刷 第五十八巻 第一号

平成二十三年一月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

平松 裕子・山口千恵子

### 発行人

今泉由利

三河アララギ発行所 〒四四二・〇三二一

豊川市御津町御馬西三七

### URL

E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp

振替口座 〇〇八三〇・六・五六三二九

Homepage <http://maizumiyun.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜創美